稲垣足穂「一千一秒物語」

近代文学をアップデートする②

池上貴子

はじめに――生成AIはタルホの夢を見るか？

平成二十八（二〇一六）年、有嶺雷太による短編「コンピュータが小説を書く日」が、星新一賞の一次選考を通過して、人々を驚かせた。実はこの作品は、人工知能プロジェクト「気まぐれ人工知能プロジェクト　作家ですのよ」の一環として、「ショートショートの神様」と呼ばれた星新一の全作品をAIによって分析し作成されたデータだったからだ。つまり、「有嶺雷太」こそが人工知能だったということだ。

それから二年後、『AI VS. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済、二〇一八年二月）において数学者の新井紀子は、数学を基とするかぎり、コンピュータは人間を越えないと断言した。実際、「ChatGPT」をはじめとする大規模言語モデルが発達した現在でも、プロンプト（指示語）によってビッグデータから確率（親和性）の高い言語の連なりを抽出するという方法が、「完成された平板な文章」という結果を生み、創作という点において、読み手に違和感をもたらしている。[1]

AIを使って小説を生成するとは、綻びのない最も小説らしい構成（文脈）をAIに選択させることだ。生成AIは言語の意味を理解したわけではないので、指示が与えられない限りは、社会、経済、民族、主義や思想、他者の集合体といった「世界の枠組み」に対し、葛藤や反発などの反動的表現をわざわざ選ばない。たとえば、先のAI小説も、星新一の小説らしく、内容がループ（円環）する構成が採択されていたが、作者ならば必ず仕組むはずの、その円環を突破する構成の「綻び」までは作れなかった。おそらく現時点での生成AIは、人間の作家なら誰もが志向する、世界を更に食い破ろうとする「自由」の夢を見ることができない。[2]

さて、このAIと人間をめぐる創作について考える時、最も興味深い応答をしてくれそうな作家は、「生まれながらの新感覚派」（瀬沼茂樹）[3]と称された「イナガキ・タルホ」こと、稲垣足穂ではないだろうか。大正末期から昭和にかけて、新感覚派に所属しつつ未来派にも接近していた足穂は、偏執的と言えるほど宇宙と機械そして様々なオブ

ジェを作品に登場させた作家だ。特徴的なのは、オブジェの無機物としての性質にこだわるあまり、「飛ばない飛行機」を理想とし、「飛行機は死ななければならなかった」との言葉にある通り、不完全さや破綻、欠損や喪失といった現象の表現を好んだことだ。[4] このように独自の美学を持つ作家のため、足穂の代表作『一千一秒物語』の内容に入る前に、しばし足穂が自身の文学論を語った「わたしの耽美主義」（「新潮」、一九二四年六月）から、創作という行為に足穂が求めていた役割や、天体やオブジェを用いて試みられた詩的効果などを踏まえておきたい。

一、解放の鍵としての「虚無性」―「わたしの耽美主義」

稲垣足穂が作家デビューした大正末期は、自然主義やその流れをくむ私小説、そしてプロレタリア文学が台頭していた時期だった。創作活動において「真の人間」の完成や「真実」の告白に文学的価値が求められていた文壇で、当時新人作家だった足穂は「わたしの個人主義」において、「本当の真珠よりか真珠まがいの硝子玉の方が面白」く、今後の芸術において価値のあるものは「完全なものよりも半端のもの」の方になってくるだろうと予見し、新感覚派の作家達からも異端の存在とされていた。さらに、作家が創作の上で求めるべき文学的な「解放」とは、「『人間らしいところ』に復帰すること」ではない、つまり「本当の人間」になることではないとして、次のように持論を展開した。

> では本当の人間とは何者であろうか。人間は人間として今日まで辿ってきて、いまや人間たることに行詰ってしまった。それを救うのは人間より以上を志すことだ。
>
> （「わたしの耽美主義」）

足穂が求めた創作の形とは、人間であることに「行き詰ってしまった」人間が、その行き詰まりを突破するための手段になり得るものであったようだ。また、その創作方法とは、「刹那的で、童話的超絶味を含み、且つ虚無性を加味したものでなければならぬ」とあえて定義づけられている。その一例として、足穂は「人間界の法則をぬきにした箒星やお月様のお化けが出没する三分間劇場と云った類い」の作品を示したが、『一千一秒物語』の源流となる思考として留意しておくべきだろう。

さて、この創作の定義で特に注目したいのは、「解放」をもたらす作品に「虚無性」という概念を必須要件とした点だ。「虚無性はあらゆる芸術の眼目とする解放へのひとすじ道を意味するからである」と、足穂自身は説明する。その虚無の根底には、「実際アルファ粒子の放射にでも